

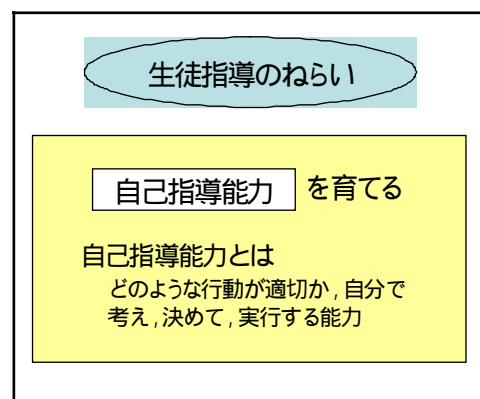
特別支援教育の中で教師が求められること

～生徒指導、教育相談、カウンセリング、ガイダンス、コンサルテーション、コーディネーション～

1. 生徒指導とは？

(1)ねらい

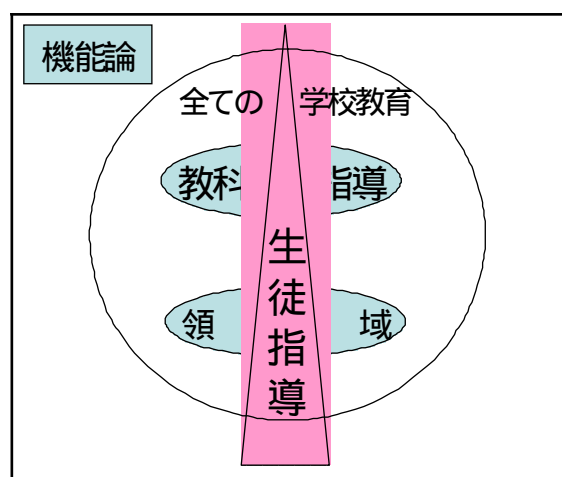
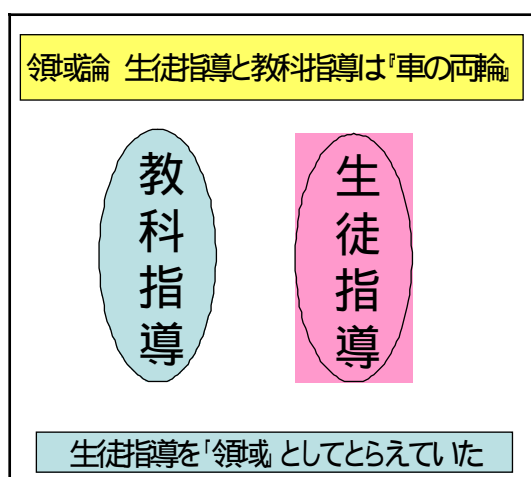
・「個々の児童生徒の自己指導能力の育成を目指す」教育の機能。どのような行動が適切か自分で考え、決めて、実行できる力（自己指導能力）を育てることが生徒指導の究極のねらいである。



(2)領域論から機能論へ

・かつて生徒指導は、教科指導とともに学校教育を支える「車の両輪」と例えられた。つまり、生徒指導は児童生徒の非行や問題行動などに対応するための領域として捉えられていた。しかし、問題行動等への対応のみでは、自己指導能力の育成が望めないことは明らかである。

生徒指導については、『生徒指導の手引』（昭和40年文部省）の中で「学校がその教育目標を達成するための重要な機能」と述べられている。児童生徒の自己指導能力を育てるためには、生徒指導が教科指導や道徳、特別活動、その他あらゆる学校教育の場で「機能」していく必要がある。こうして生徒指導は領域論から機能論へと移行した。

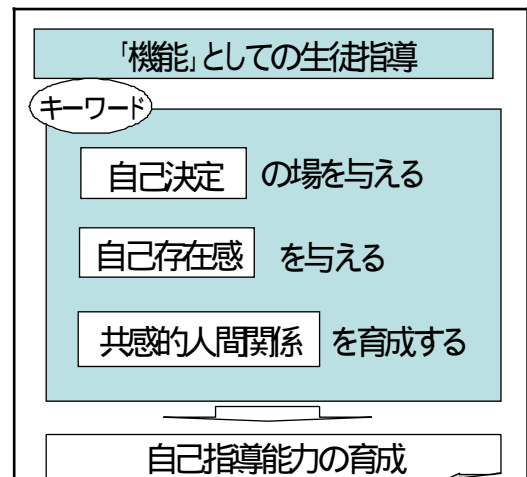


(3)機能としての生徒指導

・教育の目的は「児童生徒の人格の完成」にある（教育基本法第一条）。それ故、教師は、教科指導のみならず、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間、給食、清掃の時間など、学校における全ての教

育活動で児童生徒の人格の完成をめざすことになる。では、どのようにすればそのようなことができるのか。その答えが「全ての学校教育の場に生徒指導を機能させる」ということになる。

具体的には、全ての学校教育の場で、児童生徒に「自己存在感」と自分の行動の仕方を「自己決定」することのできる選択の場を与える。そして、これらを「共感的人間関係」を基盤にして全ての学校教育の場に作用させているとき、児童生徒のやる気が引き出され、自己指導能力が育成されることになる。このように、生徒指導が単に領域として存在するのではなく、全ての学校教育の場を貫く機能として存在する必要がある。そのときはじめて、教育の目標に結び付く生徒指導が実践できることになる。



2. 教育相談とは？

・教育相談とは、児童生徒個々の抱える困難や不安に対して、教師が共に悩み、考え、児童生徒の好ましい適応への力を援助する機能をもっているという意味合いで、生徒指導の中で重要な役割をもつ機能として位置づけられている。

・教育相談の中でも、学校における教育相談を「学校教育相談」という。

・学校教育相談の具体的な内容として、カウンセリング（広義）、ガイダンス、コンサルテーション、コーディネーションの4つがある。

・学校教育相談は、予防・開発的に行う場合（予防・開発的教育相談）と問題解決的に行う場合（問題解決的教育相談）がある。全ての教師が身につけたい教育相談の知識は、予防・開発的教育相談の分野である。加えて、問題解決的教育相談の分野も身につけられるならそれにこしたことはない。

3. カウンセリングとは？

・狭義のカウンセリングは、心理療法（サイコセラピー）と同義である。主として精神疾患の患者を対象とする。

・広義のカウンセリングは、主として健康な人を対象とする。成長の過程で誰もが直面する発達課題を乗り越えるための助言や情報を与える。一般に、「教師が使えるカウンセリング（教育カウンセリング）」という言い方がされる場合、広義のカウンセリングを指す。

* ここでは、カウンセリングを狭義と広義の二つに分けているが、カウンセリングと心理療法を分けて考える立場（ロジャーズ他）、カウンセリングと心理療法を分けて考える立場（國分他）がある。「カウンセリング」という言葉を耳にするとき、それが、どのような意味合いで語られているかを吟味する必要がある。

・カウンセリングを広義に捉える國分は、その内容を「育てるカウンセリング」と「治すカウンセリング」と大別している。前の教育相談の考え方に当てはめると、前者は予防・開発的、後者は問題解決的となる。それ故、全ての教師が身につけたいカウンセリングとは「育てるカウンセリング」である。

4. カウンセリング理論

・狭義であれ、広義であれ、カウンセリングを支える理論として、次の理論を学んでおくとよい。理論をもとに狭義のカウンセリング（心理療法）を行えば「療法」となり、広義のカウンセリングを行えば、「的カウンセリング」となる。

・アメリカの大学講義で「カウンセリング理論」を受講すると、8つの理論（精神分析理論、自己理論、行動理論、特性・因子理論、実存主義的理論、ゲシュタルト理論、交流分析、論理療法）を知っているのは常識とされる。

< 病理論から >

(1) 精神分析理論

・ 諸悪の根元は抑圧にある。なぜ抑圧がいけないかといえば、押さえ込んだ無意識に振り回されるからである。母を捨て、他人である妻と結婚するという罪障感に振り回される。(エディプスコンプレックス) 治すとは、気づかない無意識を意識化することである。

(2) 自己理論

・ 諸悪の根元は二つの自己概念のズレ。「思いこみの自分(例えば、優しい自分)」と「あるがままの自分(例えば、子どもをたたいてしまう自分)」のズレ。愛しているからこそ、子どもをたたいたと考え、たたいたという事実を認めないと不幸になる。治療目標は、あるがままの自分に気づき、自己概念を作り直すこと。すなわち、自己イメージの作り直し。自己不一致から自己一致へ。

(3) 行動理論

・ 病理の原因は、「学習が足りない(条件付けが足りない)」、あるいは、「学習したことの一般化しすぎ」と考える。治すには、前者の場合は、赤面症であれば対症療法を行うとか、後者の場合は、「目上の人には敬語を使うように」と学んだことを一般化しすぎて誰彼かまわず敬語を使ってしまうような場合、弁別学習が有効となる。

(4) 特性・因子理論

・ 病理の原因は、「自分の特性・因子に合わない環境を選んだから」と考える。例えば、「しゃべるのが不得意な人が、しゃべる世界に入ったから病気になった」と考える。治すには、テストで組み合わせの間違いに気づかせ、よりより情報を与えればよい。

(5) 実存主義的理論

・ 病理の原因は、「自分の人生の意味が見いだせないから」と考える。治すには、苦境の意味を自ら発見すれば大丈夫である。エンカウンターなどにより、カウンセラー、クライアントが共に自己開示して、自己発見を促すようにする。

・ アウシュビッツのガス室に収容されたV・フランクルの話。友人が死にたいと話したが、「私はあなたが生きる意味があると思う。あなたはお嬢さんにとって生きる源泉になってる。お嬢さんにとってはあなたが生きる意味がある。」と伝えた。友人がもし言い返したならば、そこでエンカウンターすればいい。

(6) 論理療法

・ 病理の原因は、「イラショナルナビリーフがあるから」と考える。教室で一人の生徒が「反乱」を起こす。教師は全て尊敬されなければならないというイラショナルナビリーフがあるために、自分のことをダメな教師と思い落ち込む。治すのは、カウンセラーが事実と論理にもとづいて、能動的に説得を行い、イラショナルナビリーフをラショナルナビリーフに変えること。「君が周りの全ての人を好きにならないように、君のことを好きにならない人もいる」というように、ナビリーフを変えると悩みは変わる。考え次第で悩みは消えるということ。

(7) ゲシュタルト理論

・ 諸悪の根元は、「一度作ったゲシュタルトに固執するからである」と考える。治すには、いったんできあがったゲシュタルトをつぶして、再構成する。能動的にエクササイズをさせ、エクササイズによってゲシュタルトを再構成する。例：病気で子どもを死なせてしまった23歳の母親が、自分は子殺しの母であるというゲシュタルトを持っているとする。エクササイズとして、枕を子どもに見立て、子どもに語りかけるように促す。ある程度、時間が経過したところで、ストップをかける。「今はどんな気持ち?」と尋ねる。23歳なりに自分のベストを尽くした母というようにゲシュタルトが再構成される。

・ ゲシュタルト療法では、精神分析のように解釈をするのではなく、自分から気づくの待つ。

(8)交流分析

・病理の原因は、「P A Cの出し入れがワンパターンだから」と考える。治すには、柔軟なP A Cの出し入れができるようにアドバイスする。

5. カウンセリング技法

・理論をもとに様々な技法が生まれる。

(1)精神分析理論；自由連想法、箱庭療法等

(2)自己理論；面接の基本技法（傾聴、受容、共感、支持、明確化、質問）等

(3)行動理論：逆制止、ソーシャルスキル・トレーニング等

(4)特性・因子理論：各種のテスト等

(5)実存主義的理論：構成的グループ・エンカウンター等

(6)論理療法：構成的グループ・エンカウンター等

(7)ゲシュタルト理論：構成的グループ・エンカウンター

(8)交流分析：構造分析（エゴグラム）、ストローク等

6. ガイダンス

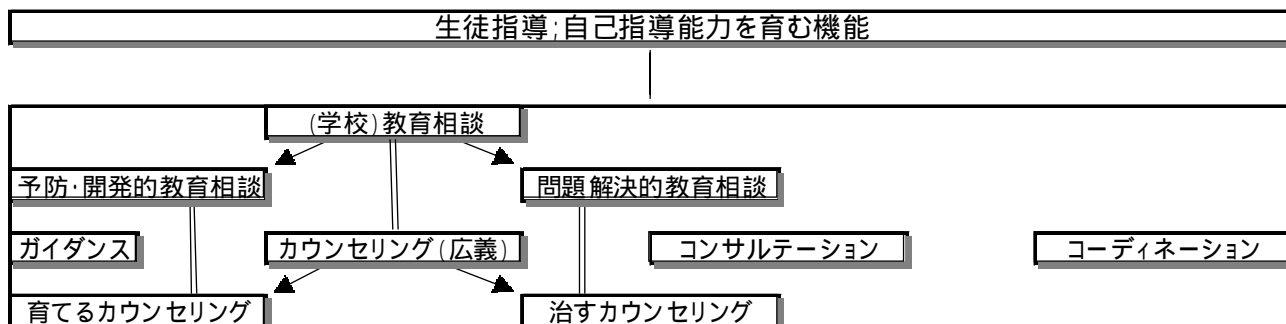
・学級や学年などの集団を対象に、情報や知識、スキルなどを提供する取り組みであり、一定の目標に向かって行われる活動。学級開きで、構成的グループ・エンカウンターを行ったり、各種検査の事後指導などもガイダンスの中に入る。

7. コンサルテーション

・コンサルテーションとは、石隈（1999）の定義によれば「異なった専門性や役割をもつ者同士が子どもの問題状況について検討し、今後の援助の在り方について話し合うプロセス（作戦会議）」である。
・面接という点では、狭義のカウンセリングもコンサルテーションも同じだが、カウンセリングが来談者自身の問題を扱うのに対し、コンサルテーションは問題を抱えている人の援助者が対象となる。例えば、教育相談係のところに担任が自分のクラスの生徒のことで相談に来た場合、あるいは保護者が自分の子どものことで相談に来た場合などは基本的にはコンサルテーションである。情報がほしくて相談に来ている人に対して、相手の感情や心理に焦点を当て、受容的共感的に徹して対応していたら、来談者は欲求不満を感じて帰ることになる。カウンセリングとコンサルテーションを混同しないことが大切である。

8. コーディネーション

・児童生徒や保護者、あるいは同僚を支援するために、学校や地域のもつリソースがうまく連携をとれるようにしたり、そのリソースがうまく機能したりするように調整を図ること。例：不登校気味の生徒が気を許している生徒に依頼し、相談相手になってもらう。子どもの問題行動に悩む保護者に教育センターでの相談を紹介する等。



9. 校内における特別支援教育の推進に向けて

(1) チームによる支援

・校内の特別支援教育がスムーズに進められるためには、教職員がチームとして特別な援助ニーズをもつ児童生徒の支援にあたる必要がある。濱田(2004)は、「教頭、生徒指導主事が学校外の関係機関との連絡調整にあたり、特殊教育経験者が個別の教育支援計画の作成など障害のある児童生徒への教育実践を担当するなど、チームで担当する方法も考えられるのではないかと提言している。このように、現状においてはチーム支援の重要性を指摘しつつ、各校の特別支援教育コーディネーターがキーマンとなってチームをリードすることが理想である。

(2) 特別支援教育コーディネーターの指名

・特別支援教育コーディネーターの指名について、文部科学省はガイドラインの中で、「各校の実情に応じて力量のある人材を選ぶことが望ましい」と示している。この「力量のある人材」に関連して、青山(2004)、宮崎(2004)、岸田(2004)は、校内での調整力があり、保護者や外部機関と連携・調整(コーディネーション)を行うことができる人材が、コーディネーターとして望ましいと述べている。このように、文部科学省や先行研究の提言からは、「連絡・調整」に関する資質・技能が、コーディネーターとして何よりも求められる力であることが示唆される。曾山・武田(2006)の調査結果からは、「連絡・調整」の自己評価が高いのは教頭であることが明らかにされており、コーディネーター養成が緒についたばかりの現状においては、教頭がコーディネーターとしてもっとも力を発揮しやすく、チーム支援をリードすることができるのではないかと考えられる。

< 参考・引用文献 >

- ・栗原慎二(2002)新しい学校教育相談の在り方と進め方．ほんの森出版
- ・石隈利紀(1999)学校心理学 - 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス．誠信書房
- ・青山芳文(2004)人と人をつなぐ特別支援教育コーディネーター．実践障害児教育Vol.368
- ・濱田匡弘(2004)教育的ニーズに応じた特別支援教育コーディネーターの在り方に関する一考察．山口県教育研究所平成15年度長期研修教員課題研究
- ・岸田優代(2004)教室で行う特別支援教育．日本教育カウンセラー協会(編), 教育カウンセラー標準テキスト 上級編．図書文化, 160-169
- ・曾山和彦・武田篤(2006)特別支援教育コーディネーターの指名と養成研修の在り方に関する検討．特殊教育学研究, 43(5), 355-361